

僧の作法は大小の戒律あり、しかりといへとも未法の僧これにしたがはず、源空これをいましむとも、たれの人がこれにしたがふへき、たゞ詮するところは念仏の相統するやうにあひはからふへし。往生の爲には念仏すてに正業也、このむねをまもりてあひはげむへきなり

とあつて一見して選択集とは矛盾する様に見える所がある。上人の考えによると選擇した戒は念仏の助業として往生の爲には出来る限り持てと勸めていられるのである。

即ち法然上人にとつて、念仏往生が才一義的なものであり、持戒法律及び學問等の念仏以外のものはすべて才二義的なものと考えられて、往生業としての念仏と諸行の間に明確な一線を引かれている。又一期物語には

此觀無量壽經若依天台宗意爾前教也。故成
法花方便

と云い次いで、

然依淨土宗意者一切教行悉成念仏方便

念仏以外のものは、全て念仏の方便、助業とし、才二義的なものとされているのである。

然るに法然上人は上記した様に、皇族、貴族等にされた授戒は單なる祈禱的授戒ではなく即ち一向專念の念仏信仰に入れる爲に方便として授けられたものであつたと考え、選擇集に於て廢捨された持戒を未信の人に対しては方便とし、既信の人々には助業として化他のために取り上げられたものである。

止觀中心の五念門

熊 沢 清 隆

止觀中心の五念門

五念門とは世親の往生論の中に説かれている礼拝、讃嘆、作願、觀察、廻向の五門であり、これが何れの經論に基づいて説かれたものであるかは明らかでないが、往生論に従つてその内容を述べてみよう。

初に才一礼拝門は「身業礼拝阿彌陀如来応正遍知、爲生彼国意故。」と論に述べている様に身口意三業の一つ身業の行で、龍樹の易行品に「無量光明慧、

身は真金山の如し。我今身口意をもて合掌し稽首し礼したてまつる。」と述べてあるのと同じの意味と思われる。

次に才三讃嘆門は「國業讃嘆。称彼如来名、如彼如来光明智相、如彼名義欲如実修行相應故。」と述べている様に口業の行で、口に彼の阿彌陀如来の功德を讃嘆すること、仏の名号を称することである。即ち阿彌陀仏は別名無礙光仏、無量光仏と称している様にその光明の徳が一番勝れているから、その名号を称する事が如来の徳を讃嘆する意味になるのである。だからここに讃嘆門と名付けられたのであろう。これは無著の攝大乘論の十八円淨説に説かれている様に、仏の光明は仏智を以つて礼となし、十六世界を照曜し一切の衆生を救済しようとする大慈悲なる働きであるからである。

次に才三作願門は「正常作願一心専念畢竟往生安樂国土、欲如実修行奢摩他故。」と述べている様に意業の行で、これは心を寂靜にすることである。心を寂靜にする為には仏を礼拝し、讃嘆しなければならぬから、初の礼拝門と讃嘆門とは心を寂靜にする為の過程にすぎない。即ち一心に専念し淨土に往生したいと

願すればやがてそれが奢摩他、これは止と訳し止観の止で心を一处に凝止して散乱しない意味であるから、寂靜三昧の情態になることである。この様に寂靜三昧の情態にならなければ次の毘婆舍那の観智が起つて来ないのである。この止の情態とは有漏雜染なる心を遠離して清淨になることであり、煩惱を滅離することである。大乘莊嚴經論に「二実は謂く所取実及び能取実なり。是の如き二実の染汚は応に遠離を求むべきなり。」と述べている様である。同じく同論に「此の法に由り依つて修行せば無分別智を得、無分別智に由りて能く諸の煩惱を破す。」と述べている様に、一心に仏を讃嘆し願すれば無分別智を得て無漏の情態になる事が出来るのである。

次に才四観察門は「智慧観察。正念観彼欲欲如実修行毘鉢舍那故。」と述べてある様に所謂智業の行で、智慧を以つて彼の阿彌陀仏及び極樂の依正二報を観察することである。

往生論にはこの観の対象を三嚴二十九句の莊嚴を示している。毘婆舍那とは観と訳し智慧の眼を開いて肉眼では見るべき事の出来ない境界、即ち三嚴二十九句を観見す

ることを指している。これは前述べた作願門で心を一处に凝らして、奢摩他寂靜三昧の情態となつた時、そこに智を得て、初めて朗然たる靈智の眼が開けて仏菩薩及び浄土の莊嚴が観見できると言うのである。この様に止の定によつて觀の慧が起つて来るのであるから、作願の奢摩他の次に毘婆舍那が説かれたものである。そして智慧を以つて浄土を觀じ、觀仏した時そこに往生が得られると説かれているから往生論は作願、觀察即ち止觀の二門を以つて正しく往生浄土の因行とするものであると認められる。我々の心は毎日外界の刺戟を受けて常に波立ち心の水はいつも濁りはてて、靈界の何物をも宿す事は出来ないが若しもこの波を静める事が出来たならば、そこに大靈の姿がありありと現われて来ると言うのである。吾々の心は今客塵煩惱により曇らされているが、本々が大円鏡智の智体であるからそれは磨けば磨くほど次第に明かるくなり、そこには今まで映らない靈界の諸象が映るのである。この様に正しく浄土を觀見することが出来る往生が得られるのは毘婆舍那の力であるがこれは作願の奢摩他と別々には觀ずることは出来ない即ちこれは止觀

同時に行ぜられるものである。そしてこの止觀の雙運行により次の才五廻向門が成就できるとされているからこの五念門行は止觀が中心と言える訳である。

次に才五廻向門は「如是菩薩奢摩他毘婆舍那広略修行、成就柔軟心、如実知広略諸法、如是成就巧方便廻向。」と述べている様に、これは一切の衆生を捨てずして、心に常に作願し廻向を首と爲して大悲心を成就することを得るが故にと述べている様に、一切の功德善根を以つて自分だけの樂を求めず、之を一切の衆生に施与して共に彼の浄土に往生しようと願ふ心と言うのであり、これは所謂利他大悲の心であつて大乘的思想の特徴と見るべき点である。この様に自分の修行で集めた所の功德善根を自分の爲にはしないで一切の衆生に施し、共に往生しようというは大悲攝取の巧みな運用であるからこれを、方便智業又は薩の巧方便廻向と名付けるのである。